令和5年5月20日

令和5年度 第1回西宮市民ファミリーハイキング事業報告

奥アンツーカ（株）

【実施日時】令和5年4月29日（土） 10:30～12:10

【実施概要・コース】

令和５年度の最初のハイキングは、山陽電鉄の東二見駅（特急停車駅）を出発し、明石海岸の遊歩道を、春の心地よい風に吹かれながら歩くコースで実施しました。まず、藤の花が咲くころに合わせて、文化財と紫陽花でも有名な住吉神社を訪れました。なお、この日は飛び入り参加する方もおられ合計で 34 名の方が参加されました。

最初は、若干の日差しが見られたものの、出発時間の10時には曇天となり、雨が心配される中、出発となりました。すぐに、明石海岸に出て遊歩道を歩きましたが、曇天ながらシーサイドウォークは、なかなか気持ちの良いものでした。

そして、藤の花が見事な住吉神社に立ち寄りました。ちょうど、祭礼のため、能舞台でのお稽古をしているタイミングに見学をすることができました。

見どころ1 住吉神社

464（雄略8）年4月初卯日に住吉大神を勧請したのが始まりで、海路の神として古来より崇敬を受けてきた神社です。境内には初代明石城主・小笠原忠真が寄進した能舞台や1648（慶安元）年に建立された豪壮な二階造りの楼門など、歴史のある文化財が多数存在します。春にはフジ、初夏にはアジサイが咲く、花の名所でもあります。
(参考:（(一社)明石観光協会 HP
https://www.yokoso-akashi.jp/facility/2523）

次に、酒蔵が立ち並ぶ江井ヶ島海岸にある、地ビールレストランや明石の海産物の売店などが入る明石ブルワリーに立ち寄りました。あいにく、ブルワリーで雨が降り始め、しばらく休憩を延長、雨が上がるのを待ちました。最後に、ヤシの木が並び南国ムードが漂う漁港と海水浴場がある江井ヶ島海岸を歩き、初級を終了しました。（4.9㎞）

見どころ2 明石ブルワリー

1998 年、兵庫県明石市で誕生した「明石ビール」。クラフトビール初心者でも飲みやすく、明石の土地柄を活かした個性的なラインナップで高い人気を誇ります。今回、明石海岸で立ち寄る江井ヶ島にある、「ながさわ明石江井島酒館」は、全国にもファンの多い「明石ビール」の醸造所、レストラン、売店が入る複合施設です。施設がある江井ヶ島は”西灘”とよばれ、古くから酒どころとして知られる地域で、建物は歴史ある酒蔵を利用しており、重厚感漂う雰囲気が味わえます。また、「セゾンビール」は、世界でも 3 番目の歴史を持つビール審査会「インターナショナルビアカップ」で 2020 年の金賞を受賞、カテゴリーチャンピオンも獲得しています。
（参考：るるぶ more HP https://rurubu.jp/andmore/article/17159 ）

この日は、この風光明媚な江井ヶ島海岸で昼食後、引き続き中級コースとして明石海岸を歩き、明石原人腰骨発見地、明石ゾウ発掘地に立ち寄り、山陽電鉄の中八木駅に向かい解散（合計7.4km）となる予定でしたが、予報通り、昼からあいにく雨模様と予想された為、初級コースのみの散策として終了となりました。

見どころ3　江井ヶ島海岸

昔、江井ヶ島一帯は嶋と呼ばれており、この嶋に港を作った行基が、海上の安全を祈祷していた時、港の中に畳2枚分ほどの大きさのエイが入ってきました。村人たちは、気味悪がってエイを追い払おうとしますが、いっこうに立ち去りません。行基がエイに酒を飲ませてやると、エイは満足そうに沖に帰っていきました。このことがあってから、誰言うとなく、エイが向かってくる嶋、鱏向島と呼ばれるようになったということです。

また、江井ヶ島一帯は昔から、「西灘の寺水」と呼ばれる良水が出るところとして知られています。そこで、ええ水が出る井戸のある嶋がつまって、「江井島」になったとも伝えられています。

江井ヶ島海岸は、ヤシの木が立ち並ぶトロピカルムード満点の海岸で、明石海峡や淡路島を一望することができます。
(参考：江井ヶ島の碑)

（一社）明石観光協会提供

なお、当日は立ち寄れなかったものの午後の立ち寄り予定先は以下の通りです。

見どころ4　明石原人腰骨発見地

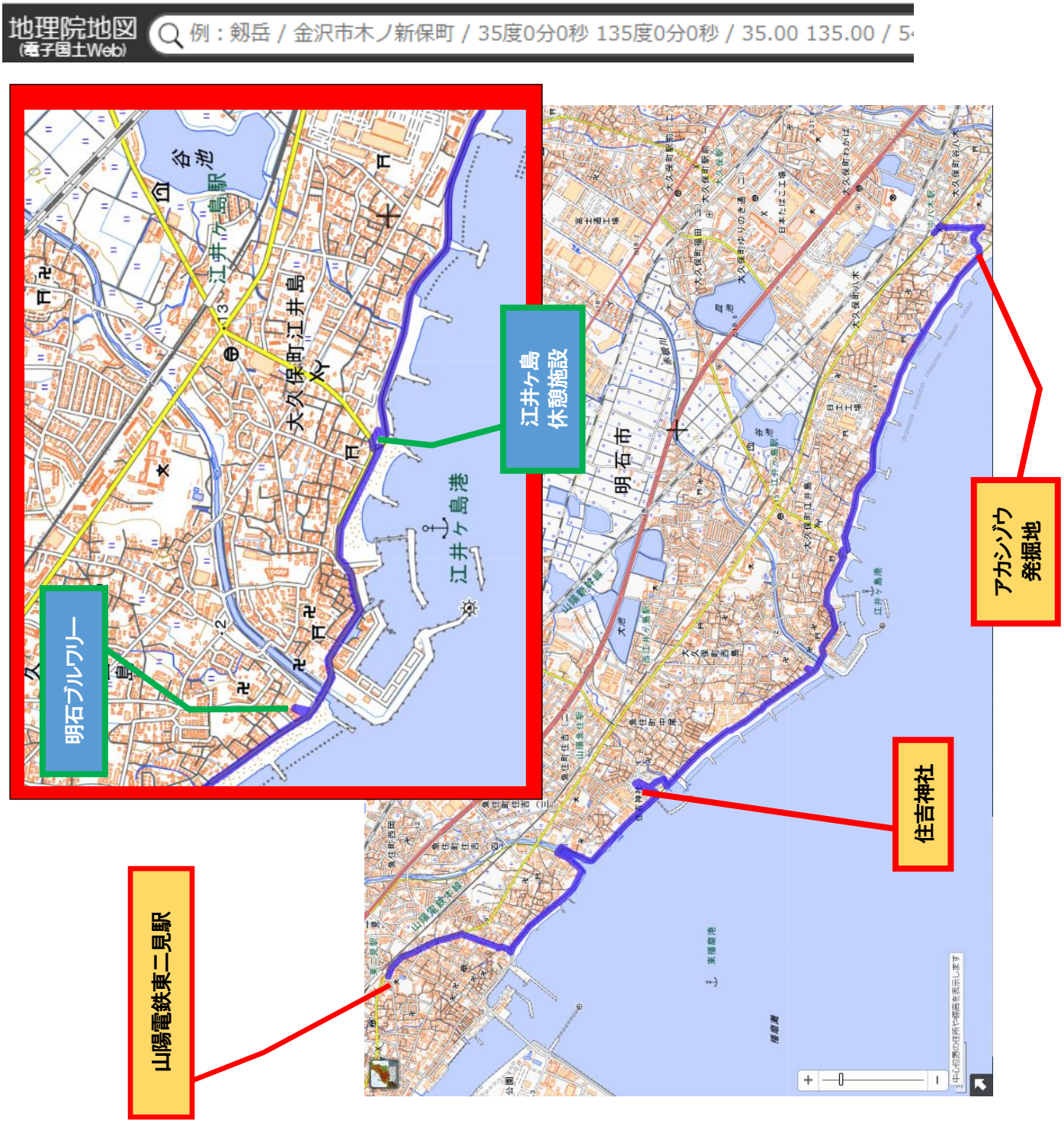
後に「明石原人」とも呼ばれることになった人類の腰の骨は、1931年に大久保町の西八木海岸の更新世の地層の崩壊土の中から発見されました。発見したのは、当時考古学や古生物学に興味を持ち、西八木海岸一帯で動物の化石や石器らしきものを採集していた直良信夫でした。 直良はその骨を旧石器時代人の骨だと考え、東京大学の松村瞭にその人骨を送り、判断を求めましたが、当時比較する資料がなく、結論が出ないまま返却されました。この骨は東京大空襲で消失しました。

戦後、人類学者の長谷部言人は東京大学に残されていた人骨の石膏模型をもとに、明石で発見された腰の骨は北京原人に匹敵する原人の骨であると発表しました。 そして現地付近の発掘調査を試みましたが、その時は期待していた成果は得られませんでした。

1982年には、東京大学の遠藤萬里と国立科学博物館の馬場悠男が世界各地から出土した人骨との比較を行い、明石人骨は縄文時代以降の新人の骨であるという説を発表しました。

国立歴史民俗博物館の春成秀爾は、人骨が化石化していたという数多くの研究者の証言や、自ら谷八木海岸で採集した剥片石器を手がかりとして、1985年に再度西八木海岸の発掘調査を行いました。 調査で直良が人骨を採取したとされる地層（西八木層）から人が加工した木器が発見され、その結果、この明石の地において、６～７万年前に旧人に相当する人類がいたことがほぼ確実になりました。
（参考：明石市立文化博物館HP　https://www.akashibunpaku.com/exhibit.html）

アカシゾウ発掘地

昭和35（1960）年、当時中学生であった紀川晴彦氏がこの海岸の崖からゾウの牙の化石を発見しました。その後、この地を一人で掘り続け、約6年間で97点におよぶゾウの歯や骨の化石を採集しました。昭和41（1966）年には、大阪市立自然史博物館が発掘を引き継ぎ新たな標本を加えました。これらの標本は同一個体であることがわかり、それをもとに初めてアカシゾウの全身骨格標本がつくられ同博物館に展示保存されています。　　（参考：一般社団法人　明石観光協会HP https://www.yokoso-akashi.jp/facility/2507）

令和5年度　第1回ハイキング（住吉神社、明石ブルワリー、江井ヶ島海岸、明石原人腰骨発見地・アカシゾウ発掘地）の行程図　（地理院地図より）